

えびフライ、とつぶやいてみた。

足元で河鹿が鳴いている。腰を下ろしている石の陰にでもいるのだろうが、張りのあるいい声が川に漬けたゴム長のふくらはぎを伝って、膝の裏をくすぐっている。つぶやくにしても声にはならぬように気をつけないと、人声には敏感な河鹿を驚かせることになる。

えびフライ。発音がむつかしい。舌が回らない。都会の人には造作もないことかもしれないが、こちらにはとんとなじみのない言葉だから、うっかりすると舌をかみそうになる。フライの方はともかくとして、えびが、存外むつかしい。

えびふらい。さっき家を出てくるときも、つい、唐突にそうつぶやいて、姉に、

「まあ、えんぴだ。なして間にんを入れる？えんぴじゃなくて、えびフライ。」

と訂正された。自分では、えびと言っているつもりなのだが、人にはえんぴと聞こえるらしい。それが何度繰り返しても直らない。

(A)、そういう姉にしても、これから釣ろうとしている川魚のことを、いつもジャッコと言っている。分校の先生から、本当は雑魚というのだと聞いてきて、

「ジャッコじゃなくて、ザッコ。」

と教えてやっても、姉はジャッコと言うのをやめない。もう中学生だから、分校の子供に物を教わるのはおもしろくないとみえて、うるさそうに、

「そつたらごと、とうの昔から覚えでら。」

そう言っているながら、今朝もまき餌にする荏胡麻を牛乳の空き瓶に詰めているところへ起きてきて、

「①ジャッコ釣りな？……んだ、父っちゃんのだしをこさえておかねばなあ。」

と姉は言った。

父っちゃんのだしというのは、父親の好きな生そばのだしのことで、父親はいつも、干した雑魚をだしにした生そばを食わないことには自分の村に帰ってきたような気がしない、と言っている。

帰るなら、もっと早くに知らせてくれればこんなに慌てずに済むものを、ゆうべ、いきなり速達で、盆には帰ると言ってくるのだから、面くらってしまう。明日はもう盆の入りで、殺生はいけなから、釣るものは今日のうちに釣っておかなければいけない。釣った魚は、祖母にはらわたを抜いてもらって、囲炉裏の火で串焼きにしてから、陰干しにする。今朝釣って、どうにか送り盆の晩には間に合うくらいだから、ゆうべは雨でも降って川が濁ったりしたらと、気が気ではなかった。

えびフライ。どいつもそいつも気にかかる。

ゆうべ、といっても、まだ日が暮れたばかりの頃だったが、町の郵便局から赤いスクーターがやって来たときは、家中でひやりとさせられた。東京から速達だというから、てっきり父親の工場現場で事故でもあったのではないかと思ったのだ。普段、速達などには縁のない暮らしをしているから、急な知らせには訳もなく不吉なものを感じてしまう。

(B)、封筒の中には、伝票のような紙切れが一枚入っていて、その裏に、濃淡の著しいボールペンの文字でこう書いてあった。

『盆には帰る。十一日の夜行に乗るすけ。土産は、えびふらい。油とソースを買っておけ。』

祖母と、姉と、三人で、しばらく顔を見合わせていた。父親は、正月休みで帰ってきたき、今年の盆には帰れぬだろうと話していたから、みんなはずっかりその気でいたのだ。

もちろん、父親が帰ってくるのはうれしかったが、正直言って土産が少し心もとなかった。えびフライというのは、まだ見たことも食ったこともない。姉に、どんなものかと尋ねてみると、

「どつたらもんって……えびのフライだな。えんぴじゃなくて、えびフライ。」

姉はにこりともせずそう言って、②あとと黙って自分の鼻の頭でも眺めるような目つきをしていた。

えびなら、沼に小えびがたくさんいるし、フライというのも給食に時たま鯖のフライが出るからわかる。けれども、両方いっしょにして、えびフライと言われると、急になんだかわからなくなる。あんな小えびをどうやってフライにするのだろうか。それとも、小さく切り刻むかすり潰すかしたのを、手頃な大きさにまとめてコロケのようにするのだろうか。そう言って祖母に尋ねてみると、祖母は、そうだともそうではないとも言わずに、ただ、

「……うめもんせ。」

とだけ言った。

それは、父親がわざわざ東京から盆土産に持って帰るくらいだから、とびきりうまいものにちがいない。だからこそ、気になって、つい、

「えびフライ……。」

と、つぶやいてみないではいけないのだ。

牛乳瓶の荏胡麻を一口、ラッパ飲みの要領で頬張って、それをゆっくりとかみ砕く。これはすこぶるまずいものだが、もうすぐうまいものが食えるのだから、今朝はあまり気にならない。父親の土産のうまさをよく味わうためにも、かえって口の中をなるべくまずくしておくほうがいいのだ。

かみ砕いた荏胡麻を唾液といっしょに、前の川面へ吹き散らす。すると、それを争って食う雑魚の口で、川面はそこだけ夕立に打たれたようにあばたになる。そこへ短い竿をふわりと振って、小さな針を落としてやる。針には、湾曲したところに荏胡麻に似せた白い粒が付けてあるから、雑魚が間違えて食いついてくる。釣るというよりも、軽く引っ掛けて上がるだけだから、竿を静かに後ろの岸へ回して手元を振ると、雑魚は簡単に砂の上に落ちる。

盆前であまり暇な釣り人がいなかったせいか、よく肥えた雑魚ばかりで、それがぴちぴちと砂の斜面を跳ねながら水辺に並べた小石の柵を越えそうになるから、思わず、「ばためぐなじゃ、こりゃあ。」

とどなりつけると、とたんに、足元の河鹿がぴたりと鳴きやんだ。

父親は、村にいる頃から、うさぎの毛皮の防寒帽でも麦わら帽でもあみだかぶりにする癖があったが、今度も真新しいハンチングのひさしを上げて、はげ上がった額をまる出しにして帰ってきた。見上げると、その広い額の横じわから上のほうは、そこだけ病んででもいるかのように生白かった。③どうやら、工事現場のヘルメットばかりは自分の流儀で気ままにかぶるというわけにもいかないらしい。淡い空色のハンチングは、まだ頭になじんでいなくて、谷間のちよつとひさしをあおられただけで慌てて上から押さえつけなければならなかった。

土間の上がり框で、土産の紙袋の口を開けてみて、まず、盛んに湯気を噴き上げる氷にびっくりさせられた。ぶっかき氷にしては不透明で白すぎる、なにやら砂糖菓子のような塊が大小合わせて十個ほどもビニール袋に入っているの、これも土産の一つかと思って袋の口をほどいてみると、とたんに中から、もうもうと湯気のようなものが噴き出てきたのだ。びっくりして袋を取り落としはすみに、中の塊が一つ飛び出した。

「あ、もったいない。」

と姉が言うので、急いで拾おうとすると、ちょうど囲炉裏の灰の中から掘り出したばかりの焼き栗をせつかちにつまんだときのように、指先にひりっとして、二度びっくりさせられた。そのうえそいつのほうから指先に吸い付いてくるので、慌てて強く手を振ると、そいつは板の間を囲炉裏の方まで転げていった。「そつたらもの、食っちゃなんねど。それはドライアイスつうもんだ。」

と、父親が囲炉裏から振り向いて言った。

父親の話によれば、ドライアイスというのは空気に触れると白い煙になって跡形もなくなる氷だという。軽くて、とけても水にならないから、紙袋の中を冷やしたりするのに都合がいい。東京の上野駅から近くの町の駅までは、夜行でおよそ八時間かかる。それから、バスに乗り換えて、村にいちばん近い停留所まで一時間かかる。それで、父親は、そのドライアイスをビニール袋にどっさりもらって、道中それを小出しにしながら来たのだという。

そんなにまでして紙袋の中を冷やし続けなければならなかった訳は、袋の底から平べったい箱を取り出して見て、初めてわかった。その箱の蓋には、『冷凍食品 えびふらい』とあり、中にパン粉を付けて揚げるばかりにした大きなえびが、六尾並んでいるのが見えていた。えびフライといっても、まだ生ものだから、父親は家へ帰りつくまでに鮮度が怪しくなったらいけないと思い、ただこの六尾のえびだけのために、一晩中、眠りを寸断して冷やしながら帰ってきたのだ。

それにしても、箱の中のえびの大きさには、姉と二人で目を見はった。こんなに大きなえびがいるとは知らなかった。今朝釣ってきた雑魚のうちでいちばん大きなやつよりも、ずっと大きいし、よく肥えている。

「ずんぶ大きかえん？ これでも頭は落としてある。」

父親は、満足そうに毛ずねをびしゃびしゃたたきながら言った。いったいどの沼で捕れたえびだろうかと尋ねてみると、沼ではなく海ではもっと大きなやつも捕れる。長えひげのあるやつも捕れる。

④父親が珍しくそんな冗談を言うので、思わず首をすくめて笑ってしまった。

午後遅く、裏の谷川のよどみに漬けておいたビールを引き揚げて戻ってくると、隣の喜作が独りで畦道をふらついていた。隣でも父親が帰ったとみえて、真新しい、派手な色の横縞のTシャツをぎこちなく着て、腰には何連発かの細長い花火の筒を二本、刀のように差していた。

「父っちゃん、帰ってな？」

喜作は一級上の四年生だが、偉そうに腕組みをしてこちらのぬれたビールをじろじろと見ながらそう言うので、

「んだ。」

とうなずいてから、土産は何かときかれる前に、

「えびフライ。」

と言った。

喜作は氣勢をそがれたように、口を開けたままきよんとしていた。

「……………なんどえ？」

「えびフライ。」

「……………えびフライって、何せ。」

それが知りたければ家に来てみる。そう言いたかったが、見せるだけでももったないのに、ついでに一口と言われるのが怖くて、

「なんでもねっす。」

と通り過ぎた。

普段、おかずの支度は全て姉がしているが、今夜はキャベツを細く刻むだけにして、フライは父親が自分で揚げた。煮えた油の中でパン粉の焦げるいい匂いが、家の中に籠った。四人家族に六尾では、配分がむつかしそうに思われたが、父親は明快に、

「お前と姉は二匹ずつ食べ。おらと婆っちゃんは一匹ずつでええ。」

と言って、その代わりに、今朝釣ってきた雑魚をビールの肴にした。串焼きにしたまま囲炉裏の灰に立てておいたのを、あぶり直して、一尾ずつ串から抜いてはしょう油をかけて食った。ビールは三本あるから、⑤はらはらして、

「あんまり食べば、そばのだしがなくならえ。」

と言うと、父親は薄く笑って、

「わかってらあに。人のことは気にしねで、えびフライをじっくりと味わって食べ。」

と言った。

揚げたてのえびフライは、口の中に入れると、しゃおっ、というような音を立てた。かむと、緻密な肉の中で前歯がかすかにきしむような、いい歯応えで、この辺りでくるみ味とっている、えもいわれないうまさ口の中に広がった。

二尾も一度に食ってしまうのは惜しいような気がしたが、明日からは盆で、精進しなければならない。最初は、自分のだけ先になくならないように、横目で姉を見ながら調子を合わせて食っていたが、二尾目になると、それも忘れてしまった。

不意に、祖母がむせてせき込んだ。姉が背中をたたいてやると、小皿にえびのしっぽをはき出した。「歯がねえのに、しっぽは無理だえなあ、婆っちゃん。えびは、しっぽを残すのせ。」

と、父親が苦笑いして言った。

(C)、食う前にそう教えてくれればよかった。姉の皿を見ると、やはりしっぽは見当たらなかった。姉もこちらの皿を見ていた。顔を合わせて、首をすくめた。

「歯があれば、しっぽもうめえや。」

姉が誰にともなくそう言うので、

「んだ。うめえ。」

と同調して、その勢いで二尾目のしっぽも口の中に入れた。

父親の皿には、さすがにしっぽは残っていたが、案の定、焼いた雑魚はもうあらかたなくなっていた。

翌朝、目を覚ましたときも、⑥まだ舌の根にゆうべのうまさが残っていた。あんなにうまい土産をもらったのだから、今朝もまた川へ出かけて、そばのだしを釣り直してこなければなるまいと思っていたのだが、その必要はなかった。父親が、一日半しか休暇をもらえなかったのも、今夜の夜行で東京へ戻ると言い出したからである。どうりせ、夕べは雑魚の食べ方が尋常ではないと思ったのだ。

午後から、みんなで、死んだ母親が好きだったコスモスとききょうの花を摘みながら、共同墓地へ墓参りに出かけた。盛り土の上に、ただ丸い石を載せただけの小さすぎる墓を、せいぜい色とりどりの花で埋めて、供え物をし、細く裂いた松の根で迎え火をたいた。

祖母は、墓地へ登る坂道の途中から絶え間なく念仏を唱えていたが、祖母の南無阿弥陀仏は、いつも『なまん、だあうち』というふう聞こえる。ところが、墓の前にしゃがんで迎え火に松の根をくべ足していたとき、祖母の『なまん、だあうち』の合間に、ふと、

「えんぴフライ……………」

という言葉が混じるのを聞いた。

祖母は歯がないから、言葉はたいがい不明瞭だが、そのときは確かに、えびフライではなくえんぴフライという言葉が漏らしたのだ。

祖母は昨夜の食卓の様子を(えびのしっぽが喉につかえたことは抜きにして)祖父と母親に報告しているのだろうかと思った。そういえば、祖父や母親が活着しているうちに、えびのフライなど食ったことがあったろうか。祖父のことは知らないが、まだ田畑を作っている頃に早死にした母親は、あんなにうまいものは一度も食わずに死んだのではなかろうか———そんなことを考えているうちに、なんとなく墓を上目でしか見られなくなった。⑦父親は、少し離れた崖っぶちに腰を下ろして、黙ってたばこをふかしていた。

父親が夕方の終バスで町へ出るので、独りで停留所まで送っていった。谷間はすでに日がかげって、

雑魚を釣った川原では早くも河鹿が鳴き始めていた。村外れのつり橋を渡り終えると、父親はとって付けたように、

「こんだ正月に帰るすけ、もっとゆっくり。」

と言った。すると、なぜだか不意にしゃくり上げそうになって、とっさに、

「冬だら、ドライアイスもいらんべな。」

と言った。

「いや、そうでもなかべおかん。」と父親は首を横に振りながら言った。「冬は汽車のスチームがききすぎて、汗こ出るくらい暑いすけ。ドライアイスだら、夏どこでなくいるべおかん。」

(D)また、停留所まで黙って歩いた。

バスが来ると、父親は右手でこちらの顔をわしづかみにして、

「んだら、ちゃんと留守してれな。」

と揺さぶった。それが、いつもより少し手荒くて、それで頭が混乱した。んだら、さいなら、と言うつもりで、うっかり、

⑧「えんぴフライ。」

と言ってしまった。

バスの乗り口の方へ歩きかけていた父親は、⑨ちょっと驚いたように立ち止まって、苦笑いした。

「わかってらあに。また買ってくるすけ……。」

父親はまだ何か言いたげだったが、男車掌が降りてきて道端に痰をはいてから、

「はい、お早う。」

と言った。

父親は、何も言わずに、片手でハンチングを上から押さえてバスの中へ駆け込んでいった。

「はい、発車あ。」

と、野太い声で車掌が言った。

問1 傍線部①から分かる姉の気持ちとして適当なものを次の選択肢から選べ。

ア、自分が「ザコ」を「ジャッコ」と呼んでいる事実を受け入れられないでいる。

イ、雑魚をとることをめんどくさいように話しているが、実は捕まえに行くことを楽しみに感じている。

ウ、あえて雑魚を「ジャッコ」と伝えることで、弟の指摘には従わない意思を示している。

エ、無意識のうちに「ザッコ」と間違えており、修正できていない。

傍線部②の時の姉の気持ちとして、どのような気持ちと予想できるか。最も適当な選択肢を選べ。

ア、エビフライを食べられる嬉しさで満たされている。

イ、エビフライを言い間違えずに言えたことを誇らしく思っている。

ウ、エビフライの発音が良くないことに腹を立てている。

エ、エビフライがどのようなものか分からないので、頭の中想像している。

問三 なぜ、工事現場のヘルメットは自分流で被ることができないのか。理由を、簡潔に説明せよ。

問四 父親がこのように話した時の気持ちとして最も適切なものを選べ。

ア、二人にお土産を期待してほしかったために、少し大きめに話した。

イ、普段とは違う一面を見せることで、二人の気を引こうとした。

ウ、実家に帰ってきた嬉しさが大きくなってる。
エ、海には大きなエビがいることを話し、エビフライへの期待値を高めている。
オ、単純に事実を伝え、大きなエビがいることを伝えようとしている。

問五 ⑤はらはらして、とあるが、なぜはらはらしたのか。その理由20字以内でを説明せよ。

問六 ⑥に関して、舌の根にうまさが残っている、とあるが、どれくらいおいしかったのか。そのおいしさを具体的に説明している箇所を見つけ、20字以内でまとめよ。

問七 この時の父親の気持ちとして、最もはまるものを次から選び記号で答えよ。

ア、死んだ母親にエビフライを食べさせてあげられなかったことを申しわけなく思っている。
イ、予定よりも早く帰ることになってしまい、残念に思っている。
ウ、久しぶりの実家を堪能できて満足しているが、またすぐに帰らないといけないことを残念に思っている。
エ、もう二度と帰ることができないと思っており、家族との別れを一人悲しんでいる。

問八 なぜ思わず「エビフライ」と言ってしまったのか。答えとして最も適切な選択肢を選べ。

ア、ありがとうを伝えようと思ったが、エビフライのことばかり考えていて間違えてしまったから。
イ、エビフライと父親に言うことで、次のお土産もエビフライになると期待し意図的に間違えたから。
ウ、エビフライのおいしさが下に残っており、そのうまみが全ての考えを麻痺させていたから。
エ、今回のお土産であったエビフライの印象が強く、エビフライのお礼を伝えようと思っていたから。
オ、父親が思ったよりも強く頭を撫でてきたことに驚き、お別れを言おうとしたが無意識に考えていた言葉が出てきてしまったから。

問九 ⑨について、ちょっと驚いたような顔をした時の父親の気持ちとして最も適切な選択肢を選べ。

ア、エビフライがそんなに好きとは知らなかったから。
イ、自分が帰ってきたことよりも、エビフライの方が印象に残っていると分かり傷ついたから。
ウ、この場面でエビフライが出て来るとは予想しておらず驚いたから。
エ、次回はエビフライ以外の食べ物を買おうと思っていたが、そんなに好きならまた買ってこようと決意したから。
オ、「エビフライ」が、息子に思い出として残っていることを驚きながらも実感したから。

問十 次の接続詞を、A～Dに入れよ。けれども ところが そんなら それから